

【作文の部】 文芸賞

初めての挫折、そして新たなスタート

本郷学園 八年 木野 和輝

私は「走ること」が得意だ。いや、「走ること」だけは自信がある。特に短距離走は、幼稚園、小学校、中学校に入学した昨年まで負けたことがない。運動会ではリレーの選手として選出されることは当たり前で、必ずチームのために貢献してきた。個人競技においては、本調子でなくても八割の力が発揮できれば、結果を出すことができていた。

私は、日頃からどうしたらもっと速く走ることができるかを考えていた。全力疾走の前には、準備体操としてアキレス腱伸ばしや太もも上げ、スタートダッシュの確認など研究を重ねていた。

しかし、今年の春の運動会のことだった。練習中、太ももの裏側に違和感を感じた。けれども、棄権などという選択肢はなく、リレーに出場した。ゴール目前で、

「ピリッー」

鋭い痛みが太ももに走った。

「右足がついてこない。」

心と頭は前へ前へ進もうともがいているが、右足が全くついてこなかった。

「どうした、自分。」

一度も負けたことのないクラスメイトの背中が自分の横をすり抜け、遠くへ遠くへと離れて行った。右足を引きずりながらのゴール。

「負けた気持ちって、こんな気持ちだったのか。」

私は、初めて挫折を体験した。全身から力が全部抜けていくような、悲しいような、心の中は空っぽの状態でだった。何が起きたのか理解するのにはしばらくぼう然としていた。

「和くん、大丈夫？」

気付けば、先輩、友達がたくさん集まってきた私を支え、温かい言葉を掛けてくれた。

私は、通院の結果、ハムストリングス、つまり、肉離れとの診断だった。筋肉が縮んだ状態から引き伸ば

された際に筋肉繊維の一部が切れる状態のことである。専属トレーナーのようにいつも父が毎晩、ぬり薬とマッサージをほどこしてくれ、感謝している。

そして、私は、回復した七月から、特設陸上部に入部した。新たなスタートである。ちょうどこの頃、パリオリンピックが開催され、柔道女子五十二キロ級の試合を見た。金メダルを期待されていたが、まさかの二回戦敗退で号泣している選手がいた。今までの自分だったら、「負け」の気持ちを理解できただろうか。泣きくずれる姿に、押しつぶされる思いを感じることもできただろうか。

これから私は、自分の体力に決して過信せず、地道に努力を重ねることを心に誓い、早朝から練習に励んでいる。勝つことだけではなく、「負けた気持ち」を大切にして、落ち込んでいる人の気持ちにそっと寄り添える選手になりたい。

